

「食品に関するリスクコミュニケーション（東京）」
～英国におけるBSE対策の変遷とリスクコミュニケーション～
アンケートの集計結果

開催日：2004年10月19日（火）

参加者数：111名 回答数：75名（回答率67.6%）

問1	ご自身について、ご回答ください。		
1)	消費者	11	14.7%
2)	農林水産業	1	1.3%
3)	食品関連事業者	17	22.7%
4)	食品関連団体	10	13.3%
5)	研究機関	7	9.3%
6)	行政関係	14	18.7%
7)	マスコミ関係	8	10.7%
8)	その他	7	9.3%
	・ 学生（2）		
	・ ISO認証機関（1）		
	・ 食肉卸売業者（1）		
	・ 肥料関係（1）		
	・ 出版社（1）		
	・ 技術士（農業、生物工学）（1）		
問2	本日の意見交換会は、何からお知りになりましたか。		
1)	食品安全委員会のホームページ	40	53.3%
2)	食品安全委員会からのご案内資料	18	24.0%
3)	関係団体からのご案内資料	10	13.3%
4)	知人からの紹介	3	4.0%
5)	その他	4	5.4%
	・ 先生からの紹介（1）		
	・ 業界紙（1）		
	・ 農小トピックスメール（1）		
	・ 無記入（1）		
問3	今回の意見交換会全般について、どのようにお考えですか。		
1)	評価する	39	52.0%
2)	やや評価する	22	29.3%
3)	あまり評価しない	7	9.3%
4)	評価しない	2	2.7%

評価理由

- ・ 講演と質疑のシンプルな方式がよい。
- ・ B S E に現実に立ち向かわれた方の、貴重な生の声を聞く事ができ、さらに、その方々と意見交換ができたから。
- ・ 山内先生の説明でわかりやすくなった。
- ・ 重要な B S E 対策は、強制的な殺処分、フィードバン及び S R M 除去なのだということが、はっきりとわかった。 B S E 対策に、その国の B S E リスクや発生背景などによって異なってしかるべきなのが、よくわかった。サーベイランスの有効範囲が大変参考になった。 P 1 7 2 「結論」は、今、日本政府が日本国民にむかってきちんと堂々と話すべきだと思った。アメリカ牛のリスクはないというのがよくわかった。
- ・ たくさんの B S E の発生を経験した U K の対策を知るとは、これからの日本国内の B S E 対策、また米国からの輸入再開にむけての対策に重要な情報を与えてくれたと思う。また、消費者の方が直接意見を述べる機会が与えられることは、非常に有意義であったと思う。
- ・ 英国の取り組みがよくわかったし、日本でも参考になる部分がいくつもあった。
- ・ B S E 先進国の実態等を知らしめるような今回のリスクコミュニケーションはもっと早くやるべきで、日本の間違った見直し後では遅すぎる。
- ・ 英国始め E U の食品安全行政の進化を B S E をテーマとして知ることが出来た。一方、消費者や生産者の意見を聞く時間をもう少しとった方が良くかと思う。
- ・ B S E 直接関与された先生の来日講演。その事実と対応、非常に参考になりました。
- ・ ただ、イギリスが 3 0 ヶ月や事故牛では 2 4 ヶ月で検査したとしても、 v C D J が 1 2 人も患者が出た国なので、あまりきつく（ルールを）したら食べるものがなくなるからじゃないかと考えやすい。
- ・ イギリスでの対策のあり方を教えていただいて、国際的に日本、アメリカの対策を見直すきっかけになったと思います。
- ・ 情報が交錯する中、何を重視すべきか分かった。米国の状況は、ほんとに理解されているのか疑問。
- ・ B S E 最大汚染国の事を知ることが、今後の日本のリスク評価、リスク管理の参考になる。
- ・ 有意義であった。同時通訳がうまかった。
- ・ 納得するまでの道は長いが意味がある。しかし、長過ぎるが…。
- ・ 最も B S E & v C J D が発生し、その対策を国を挙げて取り組んだ U K の対策がわかった。

- ・ ゼロリスクはありえない。リスク低減しかないところから、始めたところ。
- ・ 意見交換の時間がかなりとれたことはよかった。
- ・ 基本的には良いと思うが、会場からの質問には答えているが、意見を交換するところまでいっていない。
- ・ 英の対策に対する食品安全委員会のコメントが欲しい。
- ・ 情報としては新しさに欠ける。対策を支える講演といえると思う。問題点をもっと出すべきだ。
- ・ S R M除去に的を絞り、英国での事例が具体的に理解できた。
- ・ 事例としての存在評価。
- ・ 「御意見交換会」としか思えませんでした。学者によってB S Eは全く意見が異なるのですね。ブラッドレー先生は米国の状況（交差汚染など）についてご存知ないようであるのに、適当な回答をされたのが納得いかなかった。他国のリスク管理について不勉強すぎると感じた。米国でB S Eが発生していないとされているのではないか。歯科や内視鏡も現時点で院内感染対策に問題があり、それで質問したのですが...獣医の方ではなく、院内感染対策(臨床医)の意見が聞きたいと思った。肉骨粉をたべた牛で本当に感染した潜伏牛を本人が食べられるのかについて回答もらえなかった。B S Eについてもっと別の意見を持った学者を呼び討論させてほしい。プルシナー氏V S ブラッドレー氏など。この病気はまだ誰もわかっておらず、治療できないのですから。片方だけの意見では困る。質問内容で、北本先生たちが開発したような「最新の感度のよいテスト方法」で精肉部分などテストしなおす(10⁻⁵ - 8) 予定はあるのか、ときいたつもりだが回答が得られなかった(回答になっていない)。ブラッドレー氏は「フィードバンが大事」といいながらフィードバンのことに触れず、S R Mだけを強調していて変だった。リスク管理を把握していない学者を招待するのはどうかと思った。
- ・ 英国の事情、リスクに対する考え方が良くわかったが、すべて理解するというわけにはいかない。人へのB S Eプリオン感染リスクについて説明がなかったのが残念。いつかはききたい。
- ・ 消費者の意見が多くあり参考になりました。時間が足りなかった気がします。
- ・ 日本が世界の異端である事を欧州等の専門家により、もっと訴求すべき。T V、新聞などのメディアで彼らのインタビューによる露出等を増やすべき。
- ・ 客観的な英国の事例等の紹介であった。
- ・ 各方面からの食品のリスクのついての考え方、疑問点について理解できる。
- ・ Dr . B r a d l e yの講演は大変わかり易く、ポイントもしぼられ高く評価される。意見交換について、質問者の理解度、質問のポイント、方向性などがバラバラ、重複しており、この時間がもったいない。
- ・ 講演者の選出が一方的な感じがする。
- ・ 具体的な内容について議論をし、ある程度の結論を出していくことが必要ではないか。安心の議論、意見、質問が続いていた。

- ・ 日本のマスコミ関係者の「BSEヒステリー」的な報道により、消費者サイドの方々に非常にオーバーな米国産牛肉アレルギーが生まれてしまった。英国人のブラッドレー氏の講演及び質疑応答によりかなり改善されたと思う。
- ・ 様々な意見が聞くことができた為。
- ・ 意見交換でもあったが、20ヶ月齢の線引きの為に行われているように感じる。講演内容については良かったと思うが...
- ・ 講演が一名だけだと、世論操作のようで感心しない。複数の違った視点の講演を行うべきだろう。
- ・ セミナー内容自体は感謝します。ただ、なぜこの様なEUでの貴重な体験が、日本の行政に上手に反映されないのか不思議でならない(日本の全頭検査信仰など)。
- ・ すばらしい。日本はおかしな議論をしているということは、先生の話で充分理解できるはず。特に日本でのピッシングの方が危険なので、それをしている日本の牛の方がアメリカより危ないのでは？なぜもっと早い段階でこのようなことをしていただけなかったのでしょうか。政治的におかしな判断がなされそうなタイミングではおそすぎるのでは？SRM除去と30ヶ月齢でアメリカの輸入もOKでは？そうしてください！！
- ・ 講演者の話(ブラッドレー氏)は参考になったが、政府の政策ありきといえる立場の人のような気がする。異なる議者(オーストラリア、アメリカなど)ときちんと同列的に交換できるようにすべきではないか。
- ・ 英国の対応をみるのはよい機会だったが、改善点が多くみられる。
- ・ OTMの話がとても参考になった。
- ・ さまざまな情報を発信していく必要性を感じました。
- ・ 国際的な面での意見交換は良かった。
- ・ レイ・ブラッドレー博士の報告はしごくまともであり、日本のBSE対策がいかに特異なものかが浮彫りになったが、何故今回のセミナーをもっと早い段階で行わなかったのかが疑問。体面作りにしか思えない。
- ・ 質疑応答で、言葉の問題から十分なコミュニケーションがとれなかった。
- ・ 様々な立場の人から意見が聞けるから。

問4 意見交換会に出席されてどのような感想を持たれましたか。あてはまるものはすべてご回答ください。

- | | | | |
|----|-------------------------------------|----|-------|
| 1) | BSE対策について理解が深まった | 39 | 46.4% |
| 2) | 講演時間をもう少し長くしてほしい | 6 | 30.9% |
| 3) | 講演時間をもっと短くして会場参加者との意見交換の時間を多くとって欲しい | 14 | 51.5% |
| 4) | 英国におけるBSE対策の変遷は日本の対策についても参考になると思った | | |

- | | | |
|-------------------------------------------|----|-------|
| | 44 | 30.9% |
| 5) もっとわかりやすく簡単に解説してほしかった。(まだまだ難しく理解しにくい) | | |
| | 7 | 5.2% |
| 6) 今回のように海外の情勢がわかるような講演会や意見交換会をもっと企画してほしい | | |
| | 32 | 22.6% |
| 7) 講演資料がわかりやすかった | | |
| | 12 | 19.6% |
| 8) 意見交換だけではなく、もっと内容について議論することが必要だ | | |
| | 11 | 19.6% |
| 9) その他 | | |
| | 7 | 19.6% |
- ・ できたらもう少しゆっくり話を聞きたかったです(聞き取りにくかったので、すみません)。
 - ・ 通訳が早い。外人講師にはゆっくり話されるようにすれば解決。
 - ・ 意見交換によって理解が深まった。
 - ・ 講演について...通訳が早口でしゃべらなくとも良いスピードで講演すべきではないだろうか。専門用語が多い場合、もっとゆっくり話さない一般人には理解できないと思う (Silent Majority)。
 - ・ 不明な点、リスクについて、もっと正確に説明すべき。
 - ・ 講演、しかも英語を1時間続けるのは聴衆の集中力が続かない。テーマを2つにわけて、休憩やかんたんな解説、意見交換をいれてもよかったのでは。
 - ・ 日本の畜産状況の情報開示が足りていないと思う。

問5 英国における BSE 蔓延とそれに対する対策の変遷についてどのように思われますか。日本における BSE 発生及びその対策とを比較して、お書き下さい。

- ・ 英国と日本では事情が異なると思うが参考になった。ゼロリスクにはならないがリスク低減を追求するという事で英国なりに、その時々状況の許す範囲で取り組んできたのだと思う。日本でも現時点の技術等の許す範囲でできるだけの安全を追求すべきだ。
- ・ 発生の件数は多かったが着実に科学的に対策をしており参考になった。日本の全頭検査のようなアイマイな処置が行われることに確固とした信念で行政がとりくむことを希望する。本日の講師の論述は明確でよかった。
- ・ 本主催者側では「対策の変遷」ではなく「躍進化」(evolution)であるとの認識が欠けているように見える。この観点でのコミュニケーションが大切。 口内 = 実質的全頭検査、輸入 = 20M以上の検査の double standard を許さぬよう、早急に政治との調整を進めるべき。 = 定量的リスク評価を前面に出して communication を進めるこ

とを望む。SRM除去の徹底を。

- 日本の異常ともいえるけっべき主義 (= ゼロリスク信奉) が世界的にも浮き出ている事が理解できました。リスクコミュニケーションがまだまだ未発達
のこの国で、FSCはかなり特異な存在かと思われませんが、これからもがんばって下さい。
- 英国と日本は食習慣、発生当時の流通背景も全く異なる。発生時の状況やその後の対策を考えると、日本はすでに安全性が相当高いように思われる。しかし、逆に現状のBSE検査(全頭検査)は過剰ではないかとも思われた。むしろ、日本では今後、殺処分、フィードバン及びSRM除去がどのようにされているのかの徹底と情報開示をすべきと思いました。アメリカ牛の安全性が保たれているのもわかったので、輸入再開もすべきと思いました。
- UKでは多数のBSE牛が処分される様子をTV等で見たが、日本は対策が早かったせいか、UK程の混乱がおきずに現在に至っている点は、非常に良かったと思う。今後も慎重な対策を進めてほしいと考えています。
- 科学者の果たしている役割が大きいように感じるが、これは科学的見解を受け入れる社会的状況があるからなのかもしれない。日本では根拠不明の“漠然たる不安”で進まない議論や決定が多いようにも思う。
- SRM除去、フィードバンを基本対策とし、サーベランス導入というのが世界の常識である。日本の対策は馬鹿げていて、「世界の恥」と言える。
- この一件で食品安全に関する行政の透明化が増し、消費者の関心が高まった点は共通している。特に対策を取り、ある程度の成果を上げた後に更なる検討を行い続け、riskを下げるという姿勢は参考にしなければいけないのではないかと思う。
- BSEの発生とそれ以降の牛の飼料については、どのような規制対応がとられたのかを知りたいと思いました。人の食べる食肉について安全でなければなりません。BSEの発生原因と予防の原点をもっと知りたいと思いました。牛を飼育する環境や飼料についてもっと追求が必要ではないかと思いました。
- 30ヶ月以上は食べないとした最初の対策はイギリスでは正しかったように思う。30ヶ月以上は検査する、SRM除去等は、鎮静化してきたためと思われる。日本はそれほどひどい状況にはなっていない。だけれど、肉骨粉を最近まで使っていたのでこれからの発生が気がかりであり、ルールはきつくしておいた方が良いと思う。
- 情報をきちんと公開しているところがすばらしいと思います。それが安心につながるのだと思いました。
- 日本に比べ、英国のBSE対策はしっかりしている。ブラッドレー先生も英国のBSEの牛、それらしい牛100%殺したと聞いて、消費者、国の安全をしっかりと守っていると強く感じた。SRM除去が大切ということも良く分かりました。日本も見習って欲しい。

- ・ 30ヶ月齢超とか30ヶ月齢以上の言葉が混同されて使用されているので明確に区分してほしい。
- ・ 英国はBSEに関しては先進国であり、大いに参考にすべきである。
- ・ 日本で若令牛のBSEが見つかった時、農水姫田氏がフィードバンにアリの穴があいていたのでは云々との発言があったが、英国でこれだけBSE発生が減少しているのはフィードバンがうまくいっているせいだと思う。リスク管理の体制の違いか、国民性の違いか...??SRM除去の検査および監査の体制もよくわかった。
- ・ 日本におけるサーベランス体制は問題ないと思われるが、SRM除去については処理手順について問題ないかと言えば疑問が残る。日本におけるHACCP手順がどの程度周知しているか、疑問がある。
- ・ リスクコミュニケーションとともに、国のリスク管理の情報公開が必要である。
- ・ 英国は科学的根拠に基づき、原因究明、対策がなされ、結果良好な方向に進んでいる事が判った。日本も対策としては間違っているが、根拠のない「全頭検査」に何ともフンガイする。数年前の政治的は理解するが、今の議論は全くおかしい。
- ・ 対策についてではないが...Dr. Bradleyは非常に自信を持って説明している。日本のリスクミでは、学者の先生や長官が自信がなさそうに(実は未だ科学的に不明確なこともあり慎重に言葉を選んでいるのだが)かえって消費者に不安を与えている感がある。自信をもって発言し、きちんと回答して欲しい。日本とのメディア対策の違いを感じた。
- ・ 英国の状況を知りながら、日本は対応を誤り、すべて後手に回った。それを踏まえて、食品安全委を設けたことは評価できる。しかし、同委員会にリスク評価を委ねたといいながら、政府が“前のめり姿勢”で国内の検査緩和見直しを進めようとしているのはおかしい。十分反省してもらいたい。
- ・ 全頭検査が最も大切なことではなく、SRM除去こそが最も重要だというあたりまえのことを、もっと早くから国民に説明すべきだった。
- ・ 英国は発生も多く危機感をもって対応したことが分かったが、我国の対策は不十分である。
- ・ 日本においてはピッシングが実態として行われているが、汚染の可能性があるので何故全面的に禁止しないのか、疑問である。
- ・ 英国...大変だったとは思いますが、解決に向けての対応は評価できる。日本...英国の先例があるので何もして来なかったといえよう。発生後も冷静さを欠き問題が少なくない。
- ・ 食文化や消費量の違いにより「安心」に求める項目が異なるが、発生件数による事例を多く持つ国であり、日本のBSE対策には非常に参考になると考える。今後とも継続して頂きたい。
- ・ 科学的根拠にもとづく方法論確立後、行政に反映すべき。日本の場合、政治

関与による曲折が生じてしまう。

- ・ イギリスが B S E 発生が減ったのは、飼料管理もあるが、30ヶ月以上の牛で臨床症状のない牛は未検査で処分しているため、実態が本当にどうかは不明と思う。日本が2年以上、何十万頭の死亡牛を未検査処分したことで実態が不明になったのと同じだと思います。日本は輸入国に対しても厳格な自国の基準と同じ規制（特に飼料管理と危険部位除去）を求めるべき。メキシコ、中国も至急調査すべき。英国が今のサーベイランスシステムにおちつくまでには、相当数の牛の処分など、たいへんな出来事があり一朝一夕で出来たものではない。米国からの輸入を（対策がされてないのに）一緒くたにされては困る。フィードバン、飼料管理を無視した学者の話にはおどろいた。ハサップはあの雪印さえ認可されていたわけですが。日本政府は完璧に米国の飼料管理と危険部位除去について確認すべき。ブラッドレー氏は、「推測で物を言うな」と言っている。ブラッドレー先生曰く、食品のゼロリスクはないが、リスクを低くおさえるべきなのであれば、リスク不明な米国牛を輸入すべきではないということだと理解する。
- ・ 一般消費者にどのようにリスクコミュニケーションをしているのか知りたかった。日本でのリスクコミュニケーションとの違いがあるのか気になった。
- ・ リスク評価を発表して国民の納得を得る姿勢が貫かれていると思った。B S E を終息に向かわせつつある過程はとても参考になると思う。
- ・ 日本での問題点はやはり、S R M の完全除去だと思います。根本となる事なので、検討していただきたいです。
- ・ B S E に対する消費者の反応は日英両国で相当に異なっているように思えた。国民性の違い、牛肉食品が占める位置などの相違によるのかもしれない。また、英国では科学者の見解が日本より大切にされているようだ。日本には数理を使える科学者が少ないのが問題である。
- ・ 英国の失敗例と先例があったため、日本では発生当初から S R M 除去など有効な低減措置がとられたと思う。又、あれだけの患者が出たにも関わらず、その後の対策のため発生が抑えられていることから、日本での対策も現在の検査で安心を得る体制から、S R M 除去の徹底とその保証する管理体制の整備、又ピッシングなどの残された課題を対処すべきと感じた。
- ・ あれほどセンセーショナルに英国で B S E が発生し、大量の牛が殺処分されたのに、現在はなんでもなかったかのように減少にあり、2010年に0と予想していると聞き驚かされた。
- ・ 1、英国ではフィード(M B M)を通して、牛の B S E が大規模に発生した。'96年の V C J D と B S E の関連を英国政府が認めたことをきっかけに本格的に対策が厳正化された。科学的根拠のもとに消費者にも十分説明された。2、日本政府は M B M による B S E 蔓延について、十分な対応を取らず、結果として B S E の進入を許してしまった。その後、消費者の牛肉離れ、パニックを沈静化する為に全頭検査が導入されたが、あまりに政治対応である。

科学的根拠に不足していた。又、日本は「臭いものはフタ」的に事実を科学的にハッキリと消費者に告げ、何が良くて、何が悪いかということをもっとハッキリ示す義務がある。

- ・ B S E パニックにより全頭検査を実施しているが、現在とられている S R M 除去など消費者に理解されておらず、現場で検査・導入をしているものとしては非常に残念に感じた。ゼロリスクを求めるのはムダと考えるので、はやくそのことに多くの人が気づいてほしい。
- ・ 英国では 9 5 年に総戸籍制度出来たために、正確な戸籍のない牛は 9 才以上で、検査対象である。しかし日本では、まだ義務化されて 1 2 ヶ月が経っていないために 2 0 ヶ月未満ながら戸籍の不正確な牛もいるハズ。全ての牛が 2 0 ヶ月以上になるまでルール施行を待つべきだろう。
- ・ 日本ではとにかく“国内の政治的判断”に重心をおかれ、R i s k C o m m u n i c a t i o n になっていないのでは。このままでは日本の国益がそこなわれます（これだけで意見がわかっただけでないのなら末期です）。民に全てシワよせが行くのではと懸念します。
- ・ 日本はバカなことをしているのは明白では？早く世界基準にすべき。きちがい の発言はやめさせてください。ここまで S R M の重要性を言って理解できないのはおかしい。バカな国民というレッテルを世界からはられてしまう。そんな国にはしないでください。
- ・ 英国は B S E の発生源。そこには流言し政治的な思惑があり、当然歴史も異なる。日本はそれをふまえ、現行全頭検査をしている。これは、日本の現行制度は評価できる。また日本の場合の厚生行政を考えると、いつも国民を裏切ってきたことを考えると、全頭検査をいま止めることは、再び国民を裏切ることになるだろう。
- ・ O T M ルールの話が少なく、タイトルとあわない。
- ・ U K は原因の追求、解明と情報公開がはっきりしている。一方日本では、追求、解明が足りないために安全度もはっきりせず、基本的な情報のくり返し提供が足りない。日本では安全に必要な基準が何で、そのためにはどうしているのか（すべきか）をはっきり言ってほしい。3 年前の政策検査はもう不要としてほしい。
- ・ v C J D のイギリスでの発生は、食文化の違いにも起因していると思います。M B M の規制により今後の発生はないと考えます。現在の対策で充分です。
- ・ 日本の対策について、英国と同様になぜ B S E 対策について S R M 除去を中心、2 4 ヶ月令又は 3 0 ヶ月令の検査へ移行できないのか、と思う。
- ・ 世界的にも初めての病気に対し、試行錯誤があったことと思いますが、英国の対策はその分非常に科学的と言える。一方、日本の発生は英国の失敗に対するとらえ方が甘かった為発生したと言える（フィードバンは 2 0 0 1 年）。対策についても科学的とは言えず、政治的としか言えない。
- ・ 英国のような多数の症例がある国と少数の日本とでは、対策が大きく異なる

ものと思ったが、基本的データは同じであることから方向が同様。リスクが高い国の英国において、リスクコミュニケーションが進んでいることに関心があった。

- ・ 英国はBSE初発であったために対策が混迷していたと思う。その為に防除と経済活動の綱引きがあり、MBMの海外流出がおこったのではないかと。日本と英国では、発生規模、時期の違いがあるので、日本において今後、BSEが拡大することはないと思う。

問6 本日のような意見交換会にこれまでどれくらい参加したことがありますか。

1) 今回が初めて	22	29.3%
2) これまでに1回	12	16.0%
3) これまでに2回以上	38	50.7%
4) 無回答	3	4.0%

附問6 - 1 問6で3)を選択した方にお伺いします。意見交換会のあり方や進め方は改善されてきていると思いますか。

1) 以前よりは改善されてきた	18	47.4%
2) 改善すべき点がある	20	52.6%

改善すべき点があるとしたらどのような点か具体的にお書きください。

- ・ 発言者がいつもの人だけ！！ 消費者団体！！
- ・ プロセスが良く分かる手続きが重要。
- ・ リスクコミュニケーションは「全く納得」とはいかない。それは科学者etcがもっと明確に言うべきだ、「安全なものは安全！！と」、「かもしれない」「可能性がある」表現が問題。
- ・ 今回は大変判り易い英語だったので。これまでのリスコミは専門用語で話をする人が多く、もっと平易な言葉を使用した方が良いと感じていた。
- ・ 会場の人の声を聞くばかりでなく、牛肉は云々安全で、SRM除去されればもっと安全ということを周知すべき。活脳状態の人を解脱して上げないとダメ。
- ・ 主講演にサブ講演、パネラーによる討議とリスナーを交えた自由討議で盛上げる。
- ・ 毎回参加して、マニアックに発言をする限られた発言者は排除すべき。今回はDr.ブラッドレーが正しい事をきちんと説明した事はよかった。
- ・ 特に問題はない。
- ・ 消費者側意見・業界側意見を明確に区分して調査会委員に伝えるべき。
- ・ 基本的には良いと思うが、会場からの質問には答えているが、意見を交換するところまでいっていない。
- ・ 論点が明確になってきていると思います。
- ・ 質疑応答の時間が短すぎる。前もって質問をうけつけ（前日迄に）それに対

しての回答も下さい。反論したくても反論の時間がない。

- ・ とか とか目ざわり！呼ぶなどは言わないが、発言させないで欲しい。
- ・ 質問、意見は事前に提出してもらって、内容ごとに重複したものにならないようにすべき（時に消費者関連の意見は同じようなものが多い）。
- ・ 開催日程などを知るものが少ない。ホームページでしか情報が得られない。
- ・ 意見発言者が今回は消費者側に片寄っていたため、様々な意見が伺えるように事前に意見をとるなどしてはどうか。
- ・ 質問、発言を行う人が片寄ることが多い。
- ・ 偏重された Risk Communication にしないこと。
- ・ ただ、いつもの人間が発言するのはおかしなことになる。
- ・ 会場の方がより質問しやすいように、休憩時間に質問ペーパーをつのっててもよいと思う。
- ・ 意見交換の進行をうまくやってほしい。
- ・ より多くの人に質問の機会を設ける観点から、質問に対する回答があったらそれで終了させることが必要で、司会者が「よろしいですか」と念を押してまた質問をさせるのはどうかと思う。
- ・ 討論の内容を深め、相互の理解を深めることが必要。

問7 以下の食品安全委員会の取組みのうち、ご存知のものあるいは利用したことのあるものを全て選んでください。

- | | | |
|----------------------------------------------------|----|-------|
| 1) 委員会、専門調査会の傍聴が可能なこと（原則公開されていること） | 49 | 65.3% |
| 2) 食品安全委員会ホームページ（委員会や意見交換会等の配布資料及び議事録、意見募集、リスク評価等） | 58 | 77.3% |
| 3) 食の安全ダイヤル | 22 | 29.3% |
| 4) 食品安全モニター | 24 | 32.0% |
| 5) 食品の安全性に関する用語集 | 39 | 52.0% |
| 6) 食品の安全性に関する政府広報 | 22 | 29.3% |
| 7) 食品安全（食品安全委員会季刊誌） | 28 | 37.3% |
| 8) その他 | 2 | 2.7% |
| ・ メールマガジン | | |
| ・ TV、Rによる報道。 | | |

附問7 - 1 上記で選択したものについて、御意見やご感想がございましたらご記入ください。

- ・ 資料を毎回いただいておりますが、リストで把握出来ませんか。もったいないと思います。
- ・ ご苦労様です。政治に押しつぶされることなく A c i e n c e b a s i

sを主張していただきたいと思います。今後も「定量的リスク評価」を進めて下さるよう。

- ・ ファイルの大きさにも気を遣っていただけるとありがたい。パソコンが旧タイプなので、かなり重い事がある。抽出版などは？
- ・ 議事録（委員会）と中間報告書のイメージにかなりのギャップがある。メディアでの報道はもっと委員会議論の内容もリリースすべきと思う。国民はもっと詳しい議論の内容を基にして判断しなければならない。情報提供、報道のあり方でミスリードされることを気をつけてほしい。
- ・ よく分かってきてると思うが、前の厚労省の内容とほぼ同じ部分が多すぎると思う。
- ・ 委員会の議題のHPへの記載をもう少し早く出来ないか。興味あるものは傍聴したいが計画が立ちにくい。
- ・ 今後も、機会があれば傍聴したい。
- ・ 同時通訳があまりにおそまつ。最低でも専門用語の使い方ぐらいは覚えておくべき。
- ・ メディアを通じて広く情報を開示することを望みます。
- ・ 回答がない。
- ・ 日本では全頭検査を進めて欲しい。これが消費者の信頼につながると思っている。
- ・ HPへのアクセスを待っているだけでなく、積極的、能動的情報発信が必要では。特に“サイレントマジョリティ”や小中学生等を対象に。
- ・ 用語集としては例が少な過ぎるのではないか。策問も欲しい。今日の講義だけをとっても不十分だと思った。
- ・ 食品安全と冊子で受けとる方法が委員会しかないのでは、他の方法を考えて欲しい。
- ・ 季刊誌の定期購読を希望。